

シニア世代における介護ボランティア活動の有効性に関する予備的検討 — フォーカス・グループインタビューを通して —*

長崎ウエスレヤン大学 村岡 則子**

Effect of Long - Term Care Volunteer Activities by Senior Volunteer
— From Findings of Focus Group Interviews —

Noriko MURAOKA**

要旨

シニア世代のボランティアと介護職員に対するフォーカス・グループインタビュー（グループインタビュー）を実施し、介護ボランティア活動に関する意識を質的に把握した後、施設を内包した住民参加型特にシニア層に焦点をあてた地域福祉推進のあり方を検討することに目的を置いた。

研究対象は、A自治体住民で構成されたボランティア団体の3名とボランティアを受け入れている高齢者福祉施設に就労する介護職員5名である。分析方法は、逐語記録を意味内容の上で区切っていきそれを分類後、コード化した結果、両者間のボランティア活動に対する認識を抽出し分析した。ボランティア自身の活動について個人レベルでは、【気分転換】【やりがい】【自身の楽しみ】【自己研鑽】【主体的選択】、相互連結レベルでは【施設との関わり】【職員との関わり】【利用者との関わり】【外部からの承認】、地域社会レベルでは【地域交流の拡大】【行政との関わり】で構成され11カテゴリーが抽出された。介護職員におけるボランティアに対する認識について個人レベルでは、【気づき・発見】、【介護負担感の軽減】、次に施設レベルでは【ケアの補完】【活動の質と量】そして地域社会レベルでは、【地域交流の拡大】であり5つのカテゴリーが抽出された。

介護ボランティア活動に関する認識を質的に捉え他者支援の継続要因を探ることによってシニアボランティアによる介護ボランティア活動の有効性を示し高齢者相互間での支え合うあり方の一つをインタビュー結果から示唆することができた。

キーワード：

シニア世代、介護ボランティア、フォーカス・グループインタビュー、介護職員、地域福祉

1. 緒言

わが国における高齢化率は、上昇を続けており65歳以上の高齢者人口の割合は25%を超え、諸外国と比較しても最高水準の高齢化率を示す。一方で、生産年齢人口層（15歳～64歳）の減少が表面化し労働力の減少と資本ストックの形成が阻害されている現状下にある。このような社会背景のもと昨今の高齢者福祉サービスや精神障害者の地域移行支援事業などに反映されるように地域を拠点とした福祉推進においてシニア世代は^①、貴重なマンパワーとなることが期待される。

平成23年度に全国の55歳以上の男女を対象とした『高齢者の経済生活に関する意識調査結果』によれば「この1年間にどのような地域活動、ボランティア活動に参加したか」の質問項目において、55歳以上の男女46.1%が地域活動及びボランティア活動に参加している（内閣府,2011）。その内訳は、複数回答であるが「自治会・町内会・老人クラブ・NPO団体等の役員・事務局活動」が最も高く27.9%、次に「地域の環境を美化する活動」が17.6%、「地域の伝統や文化を伝える活動」が10.8%などの順である。また、「介護が必要な高齢者を支援する活動」が5.0%、「障害のある人を支援する活動」が3.7%、「子どもを育てている親を支援する活動」が3.8%、「難病や病気の人を支援する活動」が1.3%との報告がある。

このように、シニア世代は、ボランティア参加に関して意欲的な傾向にありその活動は、住み慣れた地域行事への参加割合が高く、他者への支援活動の割合は低い状況となっている。

そこで、本研究における目的として、シニア世代のボランティア並びに介護職員を対象としてフォーカス・グループインタビュー（グループインタビュー）を実施し、介護ボランティア活動に関する意識を両者から質的に把握する。そして一

* Received January 5, 2015

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

一般的にボランティア活動の実践分類において「他者への支援活動」が低い状況下で継続的に他者支援が展開されている要因を探ることにより地域におけるシニア層を含めた高齢者自身の自助力さらに高齢者相互間での共に支えあう力を強固にするあり方の一つとして、シニアボランティアによる介護ボランティア活動の有効性を示すことを試みた。なお、本稿では「他者への支援活動」を「介護ボランティア活動」として捉え考察する。

これらの取り組みによって今後、施設を内包した住民参加型の地域福祉推進の一助となることが期待できる。

II. 研究方法

1. 対象者の特徴

シニアボランティアが所属するボランティア団体の概要は、平成元年に居住区の町及び社会福祉協議会の呼びかけでボランティア活動の趣旨に賛同し結成された。ボランティアメンバー内では、活動20年の経歴を持つメンバーが多く在籍しており継続したボランティア活動が展開されていた。

主な活動内容としてA町のボランティアグループの相互連絡および交流を図り住民福祉の向上に寄与することを目的として、研修会の開催や独居老人との交流などを実践していた。ボランティア会員数は、約60名、年齢は40歳代～80歳代であり専業主婦が主な構成員であった。

組織運営では、5校区別に代表を決めて毎月1回役員会議、機関紙などを発行し活動の実績や予定を記載して、会員の連携を図るとともに毎年3回の遠足や勉強会を実施し団体内の結束と資質向上を図っていた。特に高齢者福祉施設でのボランティア活動では、定期的に同一メンバーが介入し入居者の外出・買い物の付き添いやバスハイクへの参加そして、クラブ活動での談笑など活動内容も多岐にわたっていた。

地域連携では、行事やイベントなどあればボランティア団体に連絡が入るシステムとなっており地域の行政、社会福祉協議会、福祉施設、小学校、警察などと密な連携を図りながら地域のニーズに応じた活動を展開していた。

次にインタビュー対象者は、このA自治体住民で構成されたボランティア団体の3名とボランティアを受け入れている高齢者福祉施設に就労する介護職員5名を対象とした。

シニアボランティアの属性は、A氏（女性：70歳代：ボランティア活動歴20年）、B氏（女性：

60歳代：ボランティア活動歴10年）、C氏（女性：60歳代：ボランティア活動歴7年）でいずれも介護ボランティアを中心に活動する専業主婦であった（表1）。

ボランティア受け入れ施設に在籍する介護職員の属性は、A氏（男性：20歳代：就労5年）、B氏（女性：20歳代：就労3年）、C氏（女性：20歳代：就労8年）、D氏（女性：50歳代：就労12年）、E氏（男性：40歳代：就労1年6カ月）でいずれも介護福祉士の資格保有者であった（表2）。

対象者の抽出にあたっては、該当施設におけるボランティア担当者によって選定された。

2. 調査方法

シニアボランティアとボランティア受け入れ施設の介護職員との各グループに実施したグループインタビューの結果をカテゴリー化し、両者間のボランティア活動に対する認識を抽出し分析した。グループインタビューとは、研究者がリサーチ・クエスチョンから構成した質問項目に基づいて、インタビューアとメンバーとの相互作用に基づいた口頭データを収集・分析する方法である。

グループインタビュー法は、グループメンバー（対象者）が自分のことばで、自分自身のカテゴリー枠や感じ方のもとに語るため、より対象者に近い視点で情報把握が可能であるという特徴がある（高山・安梅, 1998）。そこで、メンバー同士の発言がお互いに刺激となって、各自の発言が促されることを意図してグループでの実施を図った。分析方法は、逐語記録を意味内容の上で区切っていきそれを分類後、コード化しその後、複合分析を行った。そして記述では、カテゴリーを『』、サブカテゴリーを『』、発言内容を「」で表すこととする。

3. 調査内容

調査場所は、静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダーで記録した。また、インタビュー実施時間は2時間を目安とした。インタビューテーマは、シニアボランティアの活動と効果についてであった。

介護職員においては、就労年数、保有資格、所属部署、年齢など基本属性に加え、シニアボランティアの活動について自由に語ってもらい、ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語録を作成し分析した。

4. 調査に際しての倫理的配慮

インタビューの実施にあたり、調査の目的と方法を説明した後、インタビュー内容を録音し、録音した内容は逐語録にすることについて、研究協力の承諾を文書にて得た。

また、承諾した後も本人の意思に基づきいつでも中止できることも併せて文書に明記した。さらにグループインタビュー調査で得られたデータおよび音声から起こされたテキストデータは匿名化（ID化）して厳重に保管し分析後に破棄する旨を伝えた。

III. 結果

1. シニアボランティアを対象とした介護ボランティア活動の捉え方

ボランティア活動についての認識では、個人レベル、相互連結レベル、地域社会レベルで構成された11カテゴリーが抽出された（表3）。

まず個人レベルでは、【気分転換】【やりがい】【自身の楽しみ】【自己研鑽】【主体的選択】の5つのカテゴリーであった。ボランティア自身が捉えるボランティア活動の認識では【気分転換】【やりがい】【自身の楽しみ】に関する発言等ある一方で【自己研鑽】では、『ボランティア活動に関わる資格取得』や『定期的な勉強会』があり「定期的な勉強会をボランティア団体で実施している」、「勉強会の講師は、施設の職員や社会福祉協議会の職員、消防署、学校の先生など」「ボランティア活動をはじめヘルパーの資格を取得した」などの語りがあった。そして【主体的選択】では、「ボランティア活動の内容も選択肢がいくつもあるので、自由に選べる」といったボランティア自身が無理なく主体的に活動内容を選択しやりがいや楽しみなどの語りがあった。

次にボランティア個人とその他の社会資源を結ぶ相互連結レベルでは、【利用者との関わり】【職員との関わり】【施設との関わり】【外部からの承認】の4つのカテゴリーであった。【利用者との関わり】では『積極的コミュニケーション』、『元近隣住民・元会員』、『当事者意識』があり「利用者も顔なじみのボランティアの方が定期的に訪問することで安心している」や「施設に行くと入居者の方からボランティアの名前を呼んでくれ顔と名前を覚えている」、「他人事ではなく自分もいずれ年をとるので、相手の気持ちが良く分かる」や「入居者と自然と近所に住んでいた時の会話に戻

り話が弾む時もある」などシニアボランティアが利用者に対して共感する語りがあった。【職員との関わり】では、『積極的コミュニケーション』、『信頼関係の構築』があり、「職員とも長い期間訪問しているためコミュニケーションを図ることができ信頼関係を相互に築いている」、「職員からボランティアしながら利用者とのコミュニケーションの仕方を教わったり、自分も地元のことを教えてあげたりする」など利用者との関わりに傾倒するだけではなく職員とも積極的に関わろうとする語りがあった。【施設との関わり】では、『ボランティア先の固定化』、『ボランティア会員の情報の共有』などから高齢者福祉施設に配属するボランティアメンバーを固定化し個々の知識やスキルなどボランティア団体と施設側との情報を共有する積極的な関わりなどの語りがあった。【外部からの承認】では、『存在や活動の承認』であり家族や近隣の人々、入居者など自身の身近な人々からボランティア活動や自己存在の承認や新たな役割形成などの語りがあった。

最後に地域社会レベルでは、【行政との関わり】【地域交流の拡大】の2つのカテゴリーであった。【行政との関わり】では、『公的評価』、『ボランティアの需要と供給』であり「町（行政）が自分たちの活動をきちんと認めこれまでに数回表彰されており評価をしてくれる」など団体や個人の活動を公に評価されることによってさらにボランティアへの意欲の高まりなどの語りがあった。【地域交流の拡大】では、『様々な人々との出会い』、『地域を基盤とした交流』であり入居高齢者にとどまらず施設ボランティアを通して行政機関や他の福祉医療関係者、障害者など幅広い交流の語りがあった。

2. 介護職員を対象としたシニアボランティアによる介護ボランティア活動の捉え方

シニアボランティアについての認識では、個人レベル、施設レベル、地域社会レベルで構成された5つのカテゴリーが抽出された（表4）。

まず個人レベルでは、【介護負担感の軽減】、【気づき・発見】の2つのカテゴリーであった。【介護負担感の軽減】では、『精神的・身体的余裕』であり「職員の見守りや指示は必要だがコミュニケーションや単純作業など（歌、踊り、ゲーム、習字、紙芝居など）で職員も余裕ができる」など介護職員でなければならないより専門的ケアに専念できるとの語りがあった。【気づき・発見】で

は、『外部からの良い刺激』、『地元の情報や習慣への理解』でありシニアボランティアという外部因子が入ることにより習慣化された業務を改めて認識する機会となったこと、そして彼らのボランティア活動を「良い刺激」として介護職員らが捉えていることが語られた。また、地域の情報や習慣をシニアボランティアの介入によりケア実践の上で「貴重な情報源」と捉えている語りがあった。

次に施設レベルでは【活動の質と量】、【ケアの補完】の2つのカテゴリーであった。【活動の質と量】では、『ボランティアの事前知識の習得』、『ボランティア活動内容』でありボランティア活動前に事前知識として介護に関する知識、コミュニケーション方法、高齢者の心理、利用者の特徴などシニアボランティアに対して事前学習の必要性や理解を求める語りがあった。そして具体的活動内容としては、利用者との会話や掃除、行事の手伝い、レクリエーション実践を求める発言が多くあった。【ケアの補完】にて『利用者の一人ひとりとの会話』、『ケアの深み』、『利用者の精神安定』であり「利用者のケアを行ううえで有効」や「利用者の精神安定に繋がっている」との語りがあった。ゆっくりと時間をとり職員以外の人とのコミュニケーションを図ることの有効性と必要性が示された。

最後に地域社会レベルでは、【地域交流の拡大と促進】の1つのカテゴリーであった。【地域交流の拡大と促進】では、『ボランティア媒体』、『地域との連携強化』、『施設への理解促進』であり「ボランティアが入りだして子ども会や老人クラブ、婦人会などの活動と施設行事を一緒にすることもあり身近に地域を感じる」などシニアボランティアが地域との媒体となり地域交流の促進を促している語りがあった。

IV. 考察

1. シニアボランティア活動に対する認識

本調査より地域住民によるボランティア活動の幅広い可能性が示唆された。地域住民特にシニア層のボランティア活動は、超高齢社会の中で、地域において家族とは別に新たな集団の構成員（ボランティア団体）として社会と関わり彼ら自身の生きがいや楽しみを形成し、新たな自己価値の発見と確認作業の機会となっていた。彼らの生きがい形成は、加齢によって身体機能の低下があったとしてもサクセスフル・エイジング⁽²⁾ にとっては、極めて重要な要素であろう。

先行研究により、高齢者の社会活動として趣味活動とQOLとの間で相関が確認され、個人の好みに合った社会活動を行うことと、一人ひとりの精神的活力に関連がある（長田ら、2010）や高齢者のボランティア活動は、高齢者自身の心理的健康度を高める（藤原ら、2005）との報告があるようにボランティア活動が彼らにもたらす効果は大きいと言える。

また他のボランティア活動と異なる点は、シニアボランティア自身が「入居者が元近隣住民・元会員」でもあり、他人事ではない「当事者意識」が内在しているところであった。

介護職員にとっては、シニアボランティアの活動が彼らの介護負担を軽減しさらには、「ケアの補完」として利用者の生活歴、地元の風土・文化、地域住民との関係性など利用者理解をより深化させていることが分かる。そして、利用者にとっても、シニアボランティアを介しての社会参加や精神安定などケアの量と質共に有効な効果をもたらしていると認識していることが示された。

2. 介護ボランティア活動の継続

シニアボランティアが長期間継続した他者支援のボランティア活動を実践できている一つの可能性を示す時、質的調査の限界を踏まえて彼らの活動の特徴を提示する。ボランティア組織活動のあり方を外的アプローチとし彼らの認識を内的アプローチとすると、以下の通りとなる。外的アプローチとしては①ボランティアの固定化②ボランティアが地域住民③ボランティアの年齢層が介護サービス利用者と同世代④施設と共同で実施される定期的な研修会⑤資格取得の推進⑥固定化されたシニアボランティアの知識やスキル、保有資格に関する情報の共有⑦積極的な広報活動⑧行政からの表彰などがある。内的アプローチとしては、①当事者意識②類似した生活体験（地元の文化・風習・同世代）③主体的選択④やりがいや楽しみ⑤自己研鑽⑥交流の拡大⑦新たな役割形成などがある。これまでボランティア活動の継続要因に関する先行研究では、ボランティア仲間、やりがい、地域性の強弱、楽しみ、主体性、地域貢献などが示されている（米澤、2010；岡本、2012）。さらに、ボランティア団体が各人のニーズにあった活動を斡旋できるかどうかが課題（佐瀬、2003）と報告されている中で、長期的活動及び援助行動の継続要因の一つには、ボランティア団体としての独自の形成とシステムがある。特に組織として

の凝集性が高く、施設との連携が密であり地域ニーズもそこに情報が収集される「ボランティア活動サポート体制」と介護ニーズに対応できる豊かな人材、そして日々の学習会、ボランティア体験から「高齢者との生活」を大事にし、関わりの中から学び得た経験があったと言える。

シニアボランティアの特徴を活かした彼らの活動が利用者と介護職員との良好な相互作用をもたらした地域を巻き込んだ幅広い活動が展開されていた。コミュニティ・エンパワメントにおいて重要な点として、専門職と地域住民とのパートナーシップ（協働関係）がある（麻原，2000）。両者間のインタビューにより相互の特性を理解した上で利用者ケアの質の向上を目指して協働関係を構築していることが示された。

今回は、インタビュー調査によって彼らの語りからボランティア団体の他者支援の活動を継続するアプローチを考察したが、課題としては量的調査を実施し継続因子を抽出した後、関係性をさらに検討することが必要である。

3. シニアボランティアの有効性

介護職員が求めているシニアボランティアに対する活動内容としては、利用者との会話、レクリエーション、行事への参加として排泄や食事介助などの直接介助以外の生活支援への期待が大きいことが分かった。これは、介護の現場で就労する者にとって日頃の業務遂行において業務多忙やルーティンワークなどを背景に本来利用者が地域で生活を営む上で隣近所での立ち話や談笑、地域行事への参加や買い物が日常的に行えるような状況を整備することが支援の在り方といった介護の理念⁽³⁾に対して「あるべき姿」と実情とのジレンマが生じやすい。身体介護だけが「介護」ではなくその人の人生に寄り添いその方の生活を支援することが介護であるとした時、介護現場では、時として乖離した状態に陥りやすいことがある。そこに地域住民から構成されたボランティア団体が介護職員と利用者との間に介入することによって更なる良好な効果が利用者、ボランティア自身、介護職員間で派生すると考える。利用者にとっては、住み慣れた地元をよく知る近隣の方（定期訪問ボランティアを固定化）が訪問することにより限定された施設内での対人関係がより深みと幅に広がりを持たせることができる。

また職業として利用者と関わる介護職員にとってボランティアの介入は慣習化された業務の中に

新たな刺激を与えるとともに利用者に対するあらたな発見やさらなる理解をもたらす貴重な社会資源と機会を得ることになる。

介護職員とシニアボランティアとの「介護ボランティア」活動を軸にした相互作用は学習意欲を高める起爆剤となりSDS（Self Development System）いわゆる自己啓発活動の促進につながると考える。

V. 結論

シニア世代のボランティア並びに介護職員を対象としてフォーカス・グループインタビュー（グループインタビュー）を実施した。そして、ボランティア活動に関する認識を質的に把握し他者支援の継続要因を探ることによってシニアボランティア活動の有用性を示し高齢者相互間での支え合うあり方を検討した。その結果、以下のような知見を得た。

1. 団体の構成員（シニアボランティア団体）として社会と関わりそれが彼ら自身の生きがいや楽しみを形成し、新たな自己価値の発見と確認作業の機会となっていた。
2. 利用者にとっては、住み慣れた地元をよく知る近隣の方（定期訪問ボランティアを固定化）が訪問することにより限定された施設内での対人関係がより深みと幅に広がりを持たせることができた。
3. 介護職員は、固定化されたシニアボランティアが行うボランティア活動をケアの補完として認識していた。そして、介護職員の介護負担感を軽減しさらには、利用者理解をより深めケアに有効な効果をもたらしていると認識していた。
4. 地域福祉推進においてマンパワーとして重要視される「シニアボランティア」が施設ケアにおいても介護職員や利用者にとって有効な資源でありシニア世代の特有性を生かした可能性を示唆することができた。

本研究は、一自治体の限られた人数の対象者によるインタビュー調査結果であり質的研究であるため数値による調査の妥当性を統計学的理論に基づいて考察することは難しい。よって今後の課題としては、質的研究の妥当性と信頼性を保つためアンケート調査を実施するなど量的研究を組み合わせさらに検討していく必要がある。

謝辞

調査にご協力いただいたボランティア団体の皆様、そして介護職員並びに関係者皆様に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 「シニア世代」とは、本来、年長者等の意味を示し特定の年齢層に限定したものではない。各分野で異なるが本稿ではシニアの定義を60歳以上とした。
なお、WHO（世界保健機関）では高齢者を65歳以上としている。
- 2) サクセスフル・エイジングとは、年齢とともに老いていくことを認識しつつ、これを受容し社会生活にうまく適応し豊かな生活を送ることである。高齢者の理想的な老いの概念であり、その実現は、高齢者の究極の目標といわれている。
- 3) 「介護の理念」とは、対象者が対象者らしく生きることのできるよう「自己決定の尊重」や「自立支援」といった人間としての尊厳を支えることである。

文献

- 青山美智代・西川正之・秋山学・中迫勝：老人福祉施設における介護ボランティア活動の継続要因に関する研究，大阪教育大学紀要第IV部門教育科学48(2),343-358,2000.
- 麻原きよみ：エンパワメントと保健活動エンパワメント概念を用いて保健婦活動を読み解く，保健婦雑誌56(13),1120-6,2000.
- 安梅勅江：グループインタビュー法Ⅱ／活用事例編 科学的根拠に基づく質的研究法の展開 東京 医歯薬出版株式会社；16-9,2003.
- 大森純子：前期高齢女性の近隣他者との交流関係と健康関連QOLとの関連，日本公衆衛生雑誌，54(9),605-614,2007.
- 岡本秀明：高齢者のボランティア活動に関連する要因。厚生学の指標，53(15),8-13,2006.
- 岡本秀明・岡田進一・白澤政和：大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因—身体，心理，社会・環境的要因から—，日本公衆衛生雑誌53(7),504-515,2006.
- 長田久雄・鈴木貴子・高田和子・西下彰俊：高齢者の社会的活動と関連要因—シルバー人材センターおよび老人クラブの登録者を対象として—，日本公衆衛生雑誌，57(4),279-290,2010.
- 小林江里香・深谷太郎：都市部の中高年者におけるボランティア活動のニーズ分析，老年社会科学，27(3).314-326,2005.
- 佐瀬美恵子：団塊世代が地域でボランティアとして活躍するために—ボランティアセンター及びコーディネーターの役割を中心に—，マスタース市民白書編集委員会（編）マスタース市民白書 大阪ボランティア協会；41-49,2003.
- 杉澤悠圭・篠原亮次・安梅勅江：住民参加型の保健福祉活動の推進に向けたコミュニティ・エンパワメントのニーズに関する研究，厚生学の指標53(5),28-36,2006.
- 瀬畑克之・杉澤廉晴・マイクフェターズ他：質的研究における方法論の妥当性に関する検討—フォローアップアンケートの結果から—，プライマリ・ケア学会誌24(4)：277-83,2001.
- 高山忠雄・安梅勅江：グループインタビュー法の理論と実際—質的研究による情報把握の方法，川島書店；14,1998.
- 竹内亮・久保田晃生・高田和子・太田壽城：地域在住高齢者における身体および社会活動頻度とQuality of Lifeの変化との関係—静岡県における高齢者コホートによる縦断的研究—，生涯スポーツ学研究9(1-2),2013.
- 竹之下信子・佐藤美由紀・芳賀博・池邊敏子：地域在住高齢者の社会貢献活動に関連する要因，千葉科学大学紀要6,119-129,2013.
- 日比野直子・野呂千鶴子：医療過疎地域の医療職が捉える保健医療の現状と健康課題，日建医誌22(4),294-303,2014.
- 藤原佳典・杉原陽子・新開省二：ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義，日本公衆衛生雑誌，52(4),293-307,2005.
- 松岡英子：高齢者の社会参加とその関連要因，老年社会科学，14,15-23,1992.
- 山口麻衣・冷水豊・斉藤雅茂他：大都市独居高齢者の近隣住民・知人による声かけ・安否確認に対する選好：日本の地域福祉24,21-31,2011.
- 米澤美保子：ボランティア活動の継続要因，関西福祉科学大学紀要第14号，31-41 2010.
- 「平成23年度高齢者の経済生活に関する意識調査結果（全体版）」内閣府<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h23/sougou/zentai/>（2014.5.24）
- 「平成25年度 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果（概要版）」内閣府<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/gaiyo/index.html>（2014.10.6）

表1 グループインタビュー対象者の属性（シニアボランティア） n = 3

	性別	年齢	ボランティア歴	職種
ボランティアA	女性	70歳代	ボランティア歴20年	専業主婦
ボランティアB	女性	60歳代	ボランティア歴10年	専業主婦
ボランティアC	女性	60歳代	ボランティア歴7年	専業主婦

表2 グループインタビューの対象者の属性（介護職員） n = 5

	性別	年齢	就労年数	保有資格
介護職員A	男性	20歳代	5年	介護福祉士
介護職員B	女性	20歳代	3年	介護福祉士
介護職員C	女性	30歳代	8年	介護福祉士
介護職員D	女性	50歳代	12年	介護福祉士
介護職員E	男性	40歳代	1年6カ月	介護福祉士

表3 シニアボランティアを対象とした介護ボランティア活動の捉え方

	カテゴリー	サブカテゴリー	内 容
個人レベル	気分転換	気分転換	A 1 自分の気分転換になる
	やりがい	生きがい	A 2 この活動自体が生甲斐になっている
		意欲	A 15 自分も高齢者で他人事ではない、できるかぎりこの活動を続けていきたい
			C 7 飽きないでさまざまなことに取り組める
	自身の楽しみ	楽しみ	B 6 施設にいくと普段の生活では、カラオケなど歌わないけれどボランティアになると行って歌っている
		喜び	A 3 ボランティアで大事なことは自身が楽しむこと B 2 自分自身も楽しみながらやっているのでそれで喜ばれるととてもうれしい
	自己研鑽	定期的な勉強会	C 2 定期的な勉強会をボランティア団体で実施しており毎回、参加している講師は、施設の職員や社会福祉協議会の職員、消防署、学校の先生など
		資格取得	B 9 このボランティアをきっかけにヘルパーの資格を取った
	主体的選択	主体的選択	B 3 ボランティア活動の内容も選択肢がいくつもあるので、自由に選べる
			C 3 無理なく自分ができることを行っている
相互連結レベル	利用者との関わり	積極的コミュニケーション	A 6 利用者も顔なじみのボランティアの方が定期的に訪問することで安心している
			A 8 施設に行くと入居者の方からボランティアの名前を呼んでくれ顔と名前を覚えている
		元近隣住民・元会員	A 10 入居者の中には、自分の近所に住んでいた方が入居されており認知症が進行したとしても自分の顔をみると話しかけ近寄ってくる
			A 9 あの高齢者が待っていてくれるので行こうという励みになる
			A 11 その方が元気な頃からどんな方だったのか、どんな生活をしていたのかが分かるからこそ、できる関わりがあると思う
			A 12 自然と近所に住んでいた時の会話に戻り話が弾む時もある
	当事者意識	A 13 また施設に行ったときに元会員の方が入居してらっしゃることもあった	
		A 14 声をあちらからかけられ懐かしく話をすることもある	
	職員との関わり	積極的コミュニケーション	A 7 職員とも長い期間訪問しているためコミュニケーションを図ることができ信頼関係を相互に築いている
		信頼関係の構築	C 4 職員からボランティアしながら利用者とのコミュニケーションの仕方を教わったり、自分も地元のことを教えてあげたりする
施設との関わり	ボランティア先の固定化	A 5 施設へのボランティアでもA施設にいくのはAさん、というようにボランティアメンバーを固定している	
	ボランティア会員情報の共有	B 8 施設側も自分たちボランティア団体がどんなことができるか、得意な特色をよく知っている	
外部からの承認	存在や活動の承認	B 1 福祉施設に行くと高齢者の方々から喜ばれたり笑顔をみられたりする	
		B 11 家族や近所の方から「よく頑張ってるね」と自分の活動を褒めてくれる	
		B 10 利用者さんから拝まれたりと自分の存在を認めてもらっているような気がする	
地域社会レベル	行政との関わり	公的評価	A 4 町（行政）が自分たちの活動をきちんと認めこれまでに数回表彰されており評価をしてくれる
		ボランティアの需要と供給体制	C 5 町内の行事でボランティアが必要なときなど情報がすぐに入ってくる
	地域交流の拡大	様々な人との出会い	B 4 ボランティア活動を通して交流範囲が広がった
			C 1 ボランティア活動することでいろんな人に出会い話ができることがいい
		地域を基盤とした交流	B 5 地元の人たちとの交流が深まりこの地域のこともより理解するようになった A 16 この活動をやっているのと高齢者、障がい者、そこで働く施設の職員、他のボランティア多くの人たちと出会う A 17 地域に根ざした活動とはまさにこういうことをいうと思う

表4 介護職員を対象としたシニアボランティアによる介護ボランティア活動の捉え方

	カテゴリー	サブカテゴリー	内 容
個人レベル	介護負担感の軽減	精神的・身体的余裕	A 4 行事などの参加や協力によって職員の介護負担は、軽減につながっていると思う
			D 3 いつものボランティアさんが来ると業務に余裕ができ、気持ちも少し楽になる
			E 3 職員の見守りや指示は必要だがコミュニケーションや単純作業など（歌、踊り、ゲーム、手芸、習字、紙芝居など）で職員も余裕ができる
	気づき・発見	外部からの良い刺激	A 6 ボランティアなど外部が入ることで良い刺激になる
			A 7 地元の情報や習慣などボランティアから教わることもあり勉強する必要を日々感じる
		地元の情報や習慣への理解	E 1 長年同じ職場で働いていると業務が慣習化してしまうので、ボランティアや研修生の意見はとても新鮮で新しい気づきが発見できる
D 4 介護職員の年齢層が若いので地元や昔のことをボランティアから教えてもらう			
施設レベル	活動の質と量	ボランティア活動内容	B 3 介護職員よりも利用者や地域のことを知っていて貴重な情報源
			A 5 利用者との会話や見守り、行事の手伝いなどしてほしい
			B 2 ボランティアにしてほしい活動内容としては、レクリエーションに参加してほしい
		ボランティアの事前知識の習得	A 2 職員だけで行事などをやるにしても限りがあるので、ボランティアには積極的に参加してほしい
			C 3 希望するボランティア活動は、利用者との会話や掃除、行事の手伝いなどである
			D 1 コミュニケーション方法、利用者の特徴など把握してほしい
	ケアの補完	利用者一人ひとりとの会話	C 2 コミュニケーション方法や高齢者の心理について事前に勉強してほしい
			E 2 介護に関する知識、コミュニケーション方法を理解してほしい
		ケアの参考	A 1 施設になるとバタバタと忙しく職員が動き回っている時もあるため利用者と一人ひとりお話していただくだけでも助かる
			B 7 昔から顔なじみのボランティアの方とゆっくり話す時間があるのは、利用者にとってとても良いことだと思う
			B 6 利用者の入居前の生活など聞くことでケアの参考になる
		利用者の精神安定	B 1 利用者とのコミュニケーションを図ってくれ利用者のケアを行う上で有効だと思う
C 1 高齢者の方々もいろんな人と接することは、良いことだと思うし新鮮な意見が聞ける			
C 4 ボランティアと十分に話げた日は、利用者の顔が穏やかでくつろいでいる様子			
地域社会レベル	地域交流の拡大と促進	ボランティア媒体	D 2 利用者とのコミュニケーションは利用者の精神安定につながっている
		地域との連携強化	A 3 ボランティアさんを通して利用者が地域に入っていけたら良いと思う
			B 4 地域の行事やボランティアの情報などすぐに入って以前より連携が密になった
	施設への理解促進	B 5 地域の行事例えば子ども会や老人クラブ、婦人会などの活動と施設行事を一緒にすることもあり身近に地域を感じる	
		C 6 ボランティアさんが入ることで施設のことや利用者のことを分かってもらえるようになった気がする	

